性/別物語がいかに語られるのか

—黄盈盈『性/別・身体・物語の社会学』—

呉　桐

黄盈盈
『性/別、身体与故事社会学』
（北京：社会科学文献出版社，2018）

Tong WU

1. はじめに

中国では、1970 年代末から改革開放の実施によって社会思潮が活発化し、従来毛沢東時代にはタブー視されがちだった「性」にまつわる話題も、解禁される傾向にあった(1)。学術界においては、社会学という学科が廃止から 27 年を経て、1979 年に復興、再建されたが、当初から「性社会学」という分野が確立されていた。なお、この時期、「性」の意味するところは「セックス（sex）」と重なる部分が大きく、「性社会学」も基本的に「セクソロジー（sexology）」の文脈で理解されていた。それが社会的・文化的要素を重視する「セクシュアリティ（sexuality）」研究に本格的にパラダイム転換されるようになるのは、欧米や日本よりやや遅れて、2005 年前後のことである。この頃、かつて混同されていた「sexuality」の訳語が次第に「“性”」に統一され、概念の含意を再検討することから出発して研究の射程が徐々に拡張されていった(2)。

以降、十数年の間に多様な角度からのセクシュアリティ研究が展開されてきた。中でも、潘綏銘や黄盈盈をはじめとする中国人民大学の研究者たちが、「主体的構築」（主体建构）という視点を強調した構築主義的な調査研究を大いに推進しており、日常の生活実践における中国人主体のセクシュアリティの構築に着目することで、ローカルな文脈を反映した研究成果を数多く蓄積してきた(3)。

本書もこの視点に基づいており、自らの“性”や身体に対する被調査者の主観的な意味づけを重視している。また、対象の選択にあたり、本書はセクシュアリティの多様性を強調する「性/別」(4)概念を重視し、「最も常態的で普通の日常生活」（p.27）の中の主体に限らず、「HIV 感染者」、「乳がん患者」、「性転換者」といった、主流からやや距離があると思われるカテゴリーにも焦点を置いている。著者が一貫してもつ立場は、これら異なる主体から、従来では「隠蔽されてきた」声、いわば支配的な文化の中ではめったに聞くことのできない周辺的な語りを引き出そうとすることにある。こうした努力によって、かつて半世紀近くにわたり言葉を制限・封殺されていた中国人の“性”およびその新たな変遷が、ますます世の中で可視化し、タブー

を破るための経験的事例や言語的リソースが飛躍的に増加したことは疑いない。ただし、本書の目的はこの点にとどまらない。学術書として、研究領域におけるセクシュアル・ストーリーの生産に対する自己言及的な省察にも多くの紙幅を割いている。マス・メディアが報道した物語とは異なって、インタビュー調査やフィールドワークを通して収集した物語が「研究者の設定および『掘り起こし作業』と密接に関わっている」(p.25) とされているからである。この視点を踏まえて著者は本書で提示されている事例を「研究型の物語」と呼んでいる。それへの省察は研究者と被研究者間の調査時の相互行為についてだけでなく、よりマクロなレベルで、研究活動を通して光が当てられた物語が中国というコンテクストの中からどのように生み出されているのか、あるいは生み出されうるのか、という問いを突き詰めている。後述するように、本書は研究調査や学会発表をもセクシュアル・ストーリーの生産システムの一環として捉え、即ち、「研究型の物語」のメタ研究に踏み込んでいるのである。

以下、著者について紹介した後（2節）、本書の視座（3節）と概要（4節）をまとめる。最後に、著者の主張を踏まえて評を加えたい（5節）。

2. 著者紹介

著者の黄盈盈は現在、中国人民大学社会学研究科で准教授を務めており、また同大学の性社会学研究所の所長にも就任している。主な研究分野はジェンダー/セクシュアリティ研究、身体研究などである。学部・院生時代は中国性社会学の重鎮である潘綏銘に師事し、中国人民大学最初の人類学博士として改革開放以後の中国のセックス・ワーカーを対象とした調査研究を行なってきた。また、中国の都市部女性のセクシュアリティに関するインタビュー調査にも長年携わってきた。これまでの単著には『身体・セクシュアリティ・セクシー』(2008) と本書がある。そのほか、師である潘綏銘と共著・編著を数多く出版しており、中国のセクシュアリティ研究に豊富な論点を提供している。

本書の視点とも密接に関わっている『身体・セクシュアリティ・セクシー』(2008) は、著者の博士論文をまとめて出版したものである。黄は、被調査者の主観的な意味世界を重視した構築主義アプローチを採用し、中国の都市部における若年層女性による自らの「身体」(body)や[5]、「セクシュアリティ」、「セクシー」に対するイメージ、およびそれらの関係性を考察した。中国のコンテクストに根差した構築主義研究がほとんど未開拓だった当時、黄の研究は挑戦的なものであり高い評価を得た。その10年後に世に出された本書『性/別・身体・物語の社会学』は、「身体」という前作の関心を継承した上で、「性/別」概念を導入し、そして方法論的な検討も加えており、前作よりかなり議論の射程を広げている。

3. 本書の視座

本書のキーワードは書名を見れば一目瞭然である。ここでは「性/別」、「身体」、「物語」について、それぞれ触れておこう。

まず、「性/別」は、台湾側の研究者たちによって提示され、近年、中国語圏で応用されつつある概念である。それに対応する英文が「sexuality/gender」であるが、セクシュアリティとジェンダーという二つの概念の相互の密接な関連性を意味するだけではない。それ以上に、「性/別」という表記は、「これまでの『性別と性』という概念の内実を撹乱すること」（何 2013）を目指し、セクシュアリティ（“性”）は実に多様な内的差異を抱え、かつほかの社会的属性の格差とも複雑に絡んでいること（“別”）を、漢字の語感に即して表しているのである。黄もこの含意に鑑みて、「『性/別』のセクシュアリティとの親和性をより強調する」（p.13）ようにしていると述べている。

次に、「身体」は黄の一貫した関心であるとも言える。21 世紀以降、中国の学界では「身体」研究が増えつつあるが、そこに見られる「地に足が着いていないような宙吊り感」（p.15）を黄は批判する。彼女の関心は「主体的理解と日常的実践という 2 つの角度から、暮らしの中の身体」（p.14）を考察することにあり、それは Lock と Farquhar（2007）の提唱した「生きられた身体」（lived body）観に負っている。この「生きられた身体」は同時に、様々な二元対立の構図を飛び越えた身体（逾越的身体）でもある。黄は、社会構造と個人的行為の間で、今の研究傾向ではなお前者のほうがより重視されていると指摘している。それに対して本書では日常において無視されがちな語りに注目し、当事者たちの自律性を、その自らの身体に対するポジティブな意味づけ行為から見出そうとしている。

最後の「物語の社会学」は Plummer（1995）の *Telling Sexual Stories* から直接的な影響を受けている。Plummer のセクシュアル・ストーリーを見る視点について、黄は（1）語りの性質とポリティックス、(2) 生産と消費の過程、(3) 社会的役割と影響、(4) 背景にある社会変遷、歴史・文化的要因という 4 つの側面を挙げ、その分析の視点が激変する中国社会の性/別規範や性/別文化を理解する一助となると述べている。ただし、本書は Plummer の視点とは 2 つの点でいささか異なる。一つは、Plummer が当時イギリスで流行りつつあった話題を取り扱っているのに対し、黄は今もなお中国社会で隠蔽されがちな語りを拾い上げている。そしてもう一つは、Plummer の射程よりは控えめな形で、本書の論述は「研究」という側面に特化している。つまり、「研究者と被研究者の共謀の中で語られ、記録され」た身体に関する記憶が、「研究者と出版機関の協力によってさらに編集・再生産される」（p.24）ことを念頭に、研究のプロセスを自覚的に提示・分析することを試みているのである。

以上、書名を踏まえて本書の基本的な視座（序章）を見てきた。さらに用語について言い添えると、本稿では著者の記述に従い、内容の紹介に際しては「セクシュアル・ストーリー」ではなく、それとほぼ同義の「性/別物語」を使用する。続く節では、本書の内容（第 1 章〜終章）について順を追ってまとめていく。

4. 本書の概要

第1章では、「経血」と「セクシー」という一見相入れないテーマが同時に扱われている。黄は、「経血＝生殖」、「セクシー＝エロティック」という連想の図式が中国社会では依然として根強いとし、その中で女性自身の明るい意味づけが隠蔽されているのではないかと指摘する。そこで、インタビュー調査を通して明らかになったのは、経血を「健康」、「女性としての幸せと誇り」として捉えることや、セクシーを「美」の角度から理解することなど、いわば女性の主観的な意味世界における「非-生殖化」、「非-性化」された身体の所在である。また本章では、従来の研究において看過されていた中高年女性の語りも扱われており、「加齢」は必ずしも「老衰」や「性とは無縁」などの負のイメージを意味しないことが力説されている。

研究の実施においては、各年齢層の被調査者に応じて取られている聞き取り方式（教えを請う型・共感を披露する型など）の説明や、被調査者がある話題について語ることをためらう場面の詳細な記録がなされている。この姿勢は書籍の事例分析全体に一貫して見られる。インタビューに応じてくれること自体、被調査者がどちらかというと「“性”」を忌避していないことが想定できるが、それでも彼女たちに「語れない」瞬間があるのは、プライバシーへの配慮というよりも、社会規範や政治的タブーを懸念しているからだと黄は分析している。

第2章では、HIVの女性感染者に焦点が当てられている。「患者の身体」について、著者が提唱してきたのは「医療空間から生活空間へ」[6]という視点の転換である。「HIV とともに生きる」ことになった感染者の生活体験について、黄が注目しているのは、親密性の構築や情欲といった従来では言及されてこなかった側面である。こうした側面はしばしば「感染の伝播」と結びついて危険視されているが、当事者本人の語りを通して、黄が示したのは、彼女たちが「実生活において直面しなければならない不安、苦境、葛藤」（p.90）であり、また、そうした苦境に対応する「生活戦略」（p.90）である。例えば、感染の指標を詳細に観察し、病状の良い時に自らを「健康」だと捉えたり、また女性から男性への伝染は起きにくいと説いたりするような言説戦略が提示されている。

HIVの女性感染者に自らの体験を語ってもらうことについて、黄は「物語を掘り起こす」（挖故事）という言葉を用いて表現している。様々なルートを通してHIV感染者にアクセスし、その話を引き出そうとする著者のフィールド体験もこの章で丹念に記録されている。さらに「“性”を語る」ということに対し、黄は、調査者と被調査者の両者とも「日常生活の制約」（p.92）を受けているとし、調査者自身も「彼女たちにとって“性”は本当に重要なのか」と疑ったりすることを挙げ、調査者としての限界について省察している。

第3章は前章同様、「患者の身体」をめぐって論が展開されている。乳がんを患う女性患者について、黄はいままでの「疾患」枠組みでは、医学の場における「罹病の経験」や「治療の経験」と結びついた「身体の被る心理的・社会的悪影響」（p.99）が強調されがちであるため、切除手術などを受けて治療が一段落した後の「実際の身体的な体験や生活体験」（p.99）を捉えきれないと指摘し、「欠損」枠組みの使用を提唱する。そして「欠損」に関する分析軸として、(1) 身体的な機能や感覚、(2) 身体的な外見、(3) 自己認識・アイデンティティ、(4) 人間関係と

いう 4 つの次元を挙げている(7)。そして分析にあたり、一旦医療の場から距離を取るように意識しているのである。治療後、病状がしばらく落ち着くようになると、乳がん患者はしばしばカツラや補正パッドを着用することで外見上における身体の「正常」化を図り、また対人関係においても、夫婦関係の管理・調整や、患者同士で連帯を結ぶなどして、日常における多次元の「欠損」を補おうとする。このように、黄は「欠損」への積極的な対応を語るものを数多く並べている。しかし、その語りに見られた「正常な身体」、「正常な女性」といった患者自身の「正常」観は、現存のジェンダー規範を固定化し再生産する恐れもあると黄は指摘した。

身体や“性”に関する女性の語りの多様性、とくに日常におけるポジティブな側面については上記にまとめたが、第 4 章は、そうした語りが生み出されている背景――21 世紀以降中国社会が経験している“性”の激変――の重要な参照点である「西洋」を考察の対象としている。「西洋＝開放的」、「中国＝保守的」といった中-西に関する二元対立の認識枠組みは学術界において散々批判されてきたが、人々の日常においてはどうだろうかと黄は問題を提起し、中国と西洋の両方で生活した経験をもつカナダに移民した中国人にインタビューを行なった。その結果、西洋については、結婚に対する慎重さ、コンドーム文化、性教育の完備など、「安全な性」というイメージが浮かび上がった。それに対し、中国は逆に「乱れている」とされ、現状を懸念する声が聞かれた。こうした調査結果は中-西に関する認識の構図に対し再考を促す。そこで、黄は「西洋-伝統中国-現代中国」という三つのレベルで人々の日常的な認識論理を理解しようと主張する。つまり、保守的なイメージをもつ「伝統中国」は、「西洋」と対照するために用いられるよりも、現在では「現代中国」を逆照射するための参照点になっており、その上で「西洋」が「現代中国」の理想として再構築されるのである。中国社会における“性”の激変について、黄は、人々の見方はストレートに西洋の影響に帰属する段階を経て、複雑化したと論じている。これは今日のトランスナショナルな情報伝達と人的移動の増加とも密接に関わっており、「日常的なトランスナショナリティ」のさらなる理論化が求められると、黄は反省を踏まえた上で本章を閉じている。

この後の 2 つの章は比較的「特殊な例」からなっている。第 5 章の被調査者は「文姉ちゃん」と呼ばれるある性転換者である。黄によれば、文姉さんはマスメディアの性転換者を捉える際の「帰属論理」や「悲惨な叙述」に対して非常に強い反発の態度を取っており、性転換手術が身体に損傷をもたらすという医学的な観点にも極めて否定的であるという。文姉さん自身の語りでは、術後の生活の質的向上、自己同一性の獲得による安堵感などがより強調される。また、術後の身体的変化についても、文姉さんは服装、声色、情緒などの側面から詳細に語っている。

一方、黄は、「気の強い」文姉さんは常に調査者側の用意した質問事項や対話中の発言に対して詰問するため、インタビューが難航したことにも触れている。そしてこの行動を、文姉さんの長年主流メディアに抗ってきた経験やジェンダー理論の勉強に由来するものだとしている。長年取材に応じてきた文姉さんは、しばしば質問する聞き手の動機を予め見極めることで、質問が依拠する暗黙の前提（多くは偏見）を対話中に暴露していく慣習を身につけていた。彼女は「現存のナラティブに対して様々な工夫をし、自らの物語を作り出そうとしている。それによって対話中の主導権を増して自由な空間を勝ち取り、そこからジェンダー規範に最大限挑む」

（p.190）のである。これは文姉さんが「社会で生きていく中で自信をつけるための一種の生活戦略」（p.193）であると黄は見ている。ただし、本章では文姉さんの勢いよく語る姿勢について、警戒と懸念も示されている。というのは、その語りはある意味で本人が「意図的に創り出した台本」である可能性も否定できず、抵抗のための抵抗になりかねないからである。おそらく長年にわたるインタビューを受ける経験により、文姉さんの語りは常套化・形式化しており、語る主体の「原初」（p.168）から離れていく傾向があると黄は見ている。ここでいう「原初」について、具体的な説明はなされていないが、「純粋の主体性」や「真実」といった、「語り」を解読する際の認識論的要点と関連していることは言うまでもない。この点に関する議論は、本書の終章で集中的に提示されることになる。

第6章は全書最短の章であり、6ページしかない。この章において、黄は「ある極端な事例で女性の『情欲的身体』の展開可能性を検討したい」（p.195）と述べ、「性実践家」と呼ばれる陽春のことを取り上げている。性訓練教室を経営している陽春は、様々な「性/別規範とその他の社会規範を打破し、『正常』と『不正常』の境界を撹乱する」（p.197）存在である。彼女はセクシュアリティ関連の学会に熱心に参加し、自らの実践を積極的に披露してきた。その発表内容は常に豊富な性的体験談に基づいており、中には「世を驚かし、倫理の限界に挑んでいる」（p.196）ものも多数含まれている。そうした陽春の発言はときに会議の主催側を緊張させ、研究者の反感を買うこともあったが、黄は「身体が先行する前衛派に、どの理論家も手向かうことができない」（p.198）とし、シンボリックな意味において陽春の反骨精神をポジティブに捉えたいという。

前述の5章とは違って、第6章はインタビュー調査ではなく、学会での付き合いや観察を通して得た情報によって綴られている。本書もここでいよいよ中国の性/別物語生産の重要な場である学会に接近していく。

第7章では、学術会議を「性/別物語の生産と提示の場」（p.201）と見なし、中国社会・学界の特徴と変化、それが学会の開催に与えた影響、そして学会によって促された性/別をめぐる知的環境の更新について考察を行なっている。これはまた 2007 年から 2017 年まで「中国 Sexuality 研究国際会議」を開催してきた著者自身の物語でもある。「LGBT の顕在化」、「ネオ・フェミニズムの勃興」などの社会活動面における変化のほか、黄は、検閲と風俗産業の取り締まりの強化、国際ファンディングの縮小、学科の周縁化といった性/別研究をめぐる不利な環境についても語っている。そしてこうした状況の中、学会を開催するにあたり、大会のテーマに医学的名詞を借用することで開催の「正当性」を確保したり、使用言語を中国語に限定して意識的に脱西洋化を図ったりするなど、様々な工夫がなされていることを述べている。

さらに、社会運動との関係について、黄はこの会議には多数の社会活動家も参加していると述べ、主催者として、性/別グループの中で「政治不正確」とされる人にもなるべく発言の場を提供したいとしている。これはまた、マイノリティ内部の権力関係や重層性の問題と関連しており、果たして異なる主張をもつグループ間の同盟は可能なのかと、懸念が示されている。最後に、黄はそうした懸念に加え、いかにして深みのある議論を推進し、そして開催者自身の限界（限定的な認識枠組、世代交代の問題、学術と社会運動の両立）を克服していくべきなのか、

といった残された課題に言及して本章を結んでいる。

終章「身体がいかに記憶され、性/別がいかに語られるのか？――方法学的検討」において、黄は本書を「方法書」（p.229）と位置付けている。そして、具体的な方法論的関心について、「社会学研究者として、いかに物語を聴き、いかに物語を分析し、そしていかに傾聴、分析、創作のプロセスの中で物語を再編しているのか」（p.229）と問いかけた。

これらの問いに対して黄が用意した答えは、ライフストーリー法をめぐる理論的な検討ではない。それよりも、自らの研究データや研究体験に基づいた実践的な方法について論じられている。すでに見てきたように、調査プロセスにおける調査者と被調査者間の相互行為や著者の自己省察が第 1–7 章の中に散りばめられている。さらに本章において、黄はこれまでに調査してきた性/別物語を「語れない」（不可説）と「語りたい」（我要説）の 2 種類に大別し、どちらも「罠」が内包されていると捉えている（p.239）。黄の主張によれば、「語れない」タイプの分析にあたっては、社会的規範やタブーと絡み合う個人の記憶の不確実さへの洞察が必要であり、また、「語りたい」タイプの分析にあたっては、形式化・常套化した語りに留意し、補助的な資料・インタビューが必要である。前述した章にも反映されているように、黄は被調査者の「語れない」モーメントに直面するとき、しばしば隠蔽されがちな話を引き出すことに努め、また「語りたい」という意欲的な被調査者を前にするときには、その表層的かもしれないレトリックに十分な注意を払ってきた。

こうした「罠」を打破することへのこだわりは、著者の「真実」へのこだわりを示唆している。この点は本書の最後の一節「『真』と『偽』の再検討」に反映されている。この節で、黄は自分にとって「より良い社会学的物語」とは「様々な周辺的身体や性/別主体が舞台に上がり出演することができ、蔑視、抑圧ひいては圧迫を恐れない」（p.251）物語であるとし、その核心的な任務は「真実の披露」にあるのではなく、メディア、政治、社会運動などの「諸要素の物語生成における共謀」（p.251）を見極め、「日常に入り込んでいるが、人々が自覚していない規範と権力」（p.251）をより深く分析することにあるのだと主張している。

黄の「より良い社会学的物語」観は半ば社会運動家の立場に立った呼びかけとも言える。それはある意味で価値判断を込めた理想であり、多元的な差異を尊重する社会を構想する点では素晴らしいものである。しかし、そのために隠蔽されがちな声を「掘り起こそう」とする黄の作業は、「主体的構築」という構築主義的アプローチを強調する本書の立脚点を揺るがしかねないという矛盾も孕んでいる。この点については、次節で考察を加えていきたい。

5. 考察

全体を通してみれば、本書はいままで未発掘であった事例を多数提示しており、記録されている様々な身体や“性”に関する語り自体、非常に高い資料的価値をもっていると言える。とくに周辺的・特例的な主体の語りからは、ある程度中国社会の性/別現状やその到達点を知ることができる。一方、「語る内容」のみならず、著者は「語る行為」にも目を配っており、「語れ

ない」という沈黙や「語りたい」という反発をともに中国のコンテクストに結びつけて説得力のある分析を行っている。さらに、この「語る行為」に加え、「研究する行為」にも言及している本書は、まだ発展の初期段階にある中国のセクシュアリティ研究に方法論的な検討を提供した点において、大きな意義がある。

とくに興味深いのは第7章の「会議のポリティックス」である。ここでは学術会議を取り上げることで、ミクロレベルにおける個々人の発話と、マクロレベルにおける学科の位置づけやそれを取り巻く社会環境がうまく接合され、性/別物語の創出に関わる一つの経路が立体的に示されている。著者は学術会議を開催した自らの経験を記述し、研究者として如何に性/別物語の生産およびその公的化を押し進めてきたのかを披露している。むろん、著者の自己言及は十分に興味深いものであるが、ここで評者がさらに知的好奇心をそそられたのは、学術会議が「研究者のコミュニティ」としても機能しているのではないか、という点である。序章では、Plummer（1995）との問題関心の違いについて、黄は流行りの物語ではなく、掘り出さないと隠蔽されてしまうかもしれないような周辺的な語りを扱うと述べている。その際、「物語を掘り起こす」（挖故事）ことに努めている研究者の能動性は、実際に物語の創出に大きく寄与していると考えられる。Plummer（1995）は、新しい物語の出現を促した社会的要因として、それを聞いてくれる聴衆の出現や、語る行為を支持し、個人的な物語を公的な場に拡大させていくサポート・コミュニティの重要性を挙げている。そして、これらの条件が整ってこそ物語が語られる「時機」がやってくるのだと述べている。本書では、「研究型の性/別物語」（p.24）に焦点を当てると明言している。しかし、研究領域における性/別物語の創出にあたり、研究者グループの集合的な努力は物語の公的化にどのような影響をもたらし、またもたらすことができるのだろうか。研究者グループはどの程度「サポート・コミュニティ」になれるのだろうか。こうした疑問に関し、「社会的条件」としての研究者グループの可能性をそれほど自覚しないまま論が展開されているような印象を受けた。第2章の内容にあるように、研究者自身、「彼女たちにとって“性”は本当に重要なのか」と疑うのであれば、ここで取り扱っている事例はPlummer（1995）のいう「時機はずれ」の物語と言えるのだろうか。「時機はずれ」の物語をわざと「掘り起こす」という点において、黄は決して孤立しているわけではない。こうした研究姿勢の出現や効果を歴史的・社会的に見ていくことによって、「研究型の性/別物語」に踏み込んだ本書の深意がさらに伝わるように思われる。

また、前に触れたように、終章の「方法学的検討」に関して、著者の「真実」観もやや難解なところがある。必ずしも「真実の披露」を追求しないと主張する著者は実証主義アプローチと距離を取っているように見える。一方、語りが内包する「罠」を打破しようとする「方法学的検討」は、「ほんとうの」語りに対する著者のこだわりを窺わせるものである。例えば、著者はかつて風俗産業をフィールドワークした経験を例に挙げ、被調査者であるセックスワーカーの中には「見せかけ」の主流化言説を話す人もいたが、このような場合、「『彼女たち自身がそう語っている』からといって、その語りを「主体」の理解に結びつけることはしない」（p.248）と述べている。ここでは、虚構や偽装だと思われる語りと「主体」の間に一線が引かれるべきであり、研究者はその境界を識別する目を養うことが肝要だという著者の立場が見て取れる。

しかし、そもそも語ること自体、語り手の主体性・アイデンティティの創出に密接に関連しているので、たとえ語りの内容が「歴史の真実」や「本音」と一致しなくても、「主体」と切り離すことはできないだろう。

こうしたやや狭隘な「主体」観、「真実」観は、本書の持つ視点と無関係ではない。「生きられた身体」に反映されているように、著者は「より複雑で、被調査者の生活実態に寄り添った語りを発見し」（p.249）ようとしている。こうした信念を抱いているからこそ、常套化・形式化する語りに警戒し、研究において「『真実』には永遠に近付けない」（p.249）とまで嘆くのである。確かに、生活実践を反映する生の声は往々にして我々が持っている固有の認識枠組みを打破し、世界を見る新しい角度を示唆してくれる。その意味では追求する価値がある。しかし、たとえ日常生活そのものが表出されうるとしても、それを「真実」と同一視してよいのだろうか。「真実」にまつわる問題は、おそらく「近付ける」かどうかではなく、「唯一である」かどうかという問題である。桜井厚（2002）は、パーソナル・ナラティブ・グループの論を援用し、「大文字の真実」に対し、「複数の真実」を主張している。即ち、人生について話すとき、たとえ人々が混乱や、虚構、偽装などの状態にあったにしても、それは「私たちに経験の複数の真実をあたえている」（桜井 2002: 195）のである。そうした複数の真実の創作には、語り手の置かれたコンテクストやもっている世界観はもちろん、調査者の研究過程も関わっているとされる。上記の例で言えば、「『見せかけ』の主流化言説」も、それに対する研究側の解釈も、真実の一部にほかならない。

また、「隠蔽されてきた」語りを拾い上げ、「生活実態に寄り添った語り」を求める際、もう一つの危ういところは、語る行為への調査者側の介入である。終章において、著者は本書の語りを「語れない」と「語りたい」の二類型にまとめているが、「語りたくない」という類型には言及していない。語ることへの語り手の主観的な抵抗感の不在（一類型として取り上げられていないこと）は、インタビューにおける非対称的な権力関係、とりわけ研究者側の統制力を感じさせる。インタビューにおいて「語らせる」ことは、「権力作用」の体現や、「社会学的暴力」の側面がある（桜井 2002: 265）一方、語り手が自分の言葉を生み出し、沈黙を克服することを助ける、つまりエンパワーメントの側面もあるといわれる（桜井 2002: 286）。この諸刃の剣を著者がいかに意識し、調査の場で操作していたのかについて、説明が加われば、本書の立場性も一層明確になるはずである。

総じて言えば、本書の「方法学的検討」はインタビューの技法に重点が置かれており、それに対し認識論的枠組みについての説明がやや不足している。「方法書」として、さらに議論を展開し、精緻化する余地があるように思われる。また、著者自身も認めているように、本書が扱っている物語や方法は、コンテクストを変えるとそれほど目新しいものではないかもしれない。ただ、著者によれば、本書の目論みは、オリジナリティを絞り出すことよりも、「ある具体的な時空間の中である種の意図的な『対話』を図ること」（p.251）にある。ここでの「対話」は周辺的な性/別主体の主流との対話、および周辺的な中国性社会学の他学科・他国との対話を指していると考えられよう。先に本書の議論がさらに深化する可能性について、評者なりの意見を述べたが、それも「対話」の一助になれば幸いである。

〈注〉

(1) 改革開放直前の文化大革命期（1966–1976）には、「無性文化」のイデオロギーがきわめて強固であった。「無性文化」とは、あらゆる文化領域で「性」をタブー視することを意味しており、その象徴として当時唯一公認されていた娯楽である「革命模範劇」（様板戯）が挙げられる。婚姻、性愛を一切排除するこの種の劇は極端な禁欲主義の表れであり、今でも文革時代の社会風潮をシンボリックに示す存在だとされている。

(2) 2005年に「第10回中国Sexuality研究国際会議：中国における“性”研究の起点と使命」が行われ、「sexuality」 をめぐる概念の整理や将来の展望が議論されていた。中国語圏では「sexuality」の訳語として多数の用語が混在していたが、2005 年あたりの議論を経て、次第に「性」という漢字一文字で「sexuality」概念の可塑性を表すことで合意がなされた（潘・黄 2011）。ただし、この翻訳は「sex（性）」との区別がつきにくい点でかえって「sexuality」概念のもつ革新性を損ないかねない。その折衷的な解決法としてクォーテーションマーク付きの「“性”」がしばしば用いられている。

(3) 中国のセクシュアリティ研究における「主体的構築」という視点の導入は、潘綏銘・黄盈盈（2007）に詳しい。

(4) 後述するが、「性/別」概念はとくにセクシュアリティ（“性”）における多様な差異（“別”）を漢字表記で強調するものとして、台湾の研究者たちによって提唱された。詳しくは、IGS（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター）が編集・刊行した台湾国立中央大学教授の何春蕤の講義集『「性/別」撹乱―台湾における性政治』（2013）を参照。

(5) 原作の中国語の書名は『身体・性・性感』である。タイトルにある三つのキーワードはそれぞれ「body」、「sexuality」、「sexy」にあてはまるが、無批判に英語圏の概念をそのまま中国の文脈に援用するつもりはないと、著者は主張している。

(6) 黄は「医療」の視点の重要さを否定してはいない。かなり多くのHIV感染者にとって、いかに病気と戦い、いかに差別されずに治療が受けられるかは依然として重要な課題である。しかし、医学技術の発展により、平均余命が長くなるにつれて、「日常生活」の重要性もますます浮上するのである（p.72）。

(7) 「疾患」と「欠損」とは完全に切り離された概念ではない（p.119）。むろん、(1) の「身体的な機能や感覚」は「罹病」や「治療」の経験と密接に関連している。ただし、ここの記述は従来では看過されてきた（2）～（4）に重点が置かれており、また、治療後の日常生活における女性の対応がメインに綴られている。

〈文献〉

Kenneth Plummer, 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change, and Social Worlds*, London and New York: Routledge.

Margaret Lock and Judith Farquhar eds., 2007, *Beyond the Body Proper Reading the Anthropology of Material Life*, Durham: Duke University Press.

何春蕤，2013,『「性/別」攪乱：台湾における性政治』御茶の水書房.

黄盈盈，2008,『身体· 性· 性感：対中国城市年軽女性的日常生活研究』北京：社会科学文献出版社.

潘綏銘・黄盈盈，2007,「″主体建构″：性社会学研究的革命及本土発展空間」『社会学研究』3：174-193.

————，2011,『性社会学』北京：中国人民大学出版社.

桜井厚，2002,『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房.